エアンナ地区古拙Ⅲ層について
——Stampflehmgebäude を中心に——

岡 田 明 子

The Architectures of the Eanna Precinct
in the J. N. Period

Was the “Stampflehmgebäude” the Residence
for the Rulers?

Akiko OKADA

Those magnificent large temples in Eanna Precinct at Uruk, which had highly developed during the Uruk period, completely disappeared at the point of transition to the next Jamdat Nasr period. In the “Zwischenschicht” there were more than fifteen troughs dug into the ground for the purpose of purification of the whole sanctuary by the “Brandopfer”. In this new phase (Uruk-III Stratum) the High Terrace was the only imposing construction relating to the religious rituals. Other structures were composed of many small rooms, courtyards, and corridors. This great change was performed in such a short term that there must be taken into consideration of the existence of the powerful leaders who could control both a mass of man-power and financial ability. The “Stampflehmgebäude” (100 x 120 m²) newly excavated westward the High Terrace may be the largest building in Eanna Precinct through the J.N. period. Compared with the palaces in the Early Dynastic period, I would like to find some clues as to whether this gigantic labyrinthian building was the oldest “palace” in early Sumerian City-States.

I はじめに

「王権が、天から下された時、王権は、まずエリドゥにあった。

エリドゥでは、アルリムが王となり、28800年在位した。

アラルガルは、36000年在位した。

王二人が、64800年統治した。

さて、王権はエリドゥを去り、バド・ティビラへ移行した。」

これは、シュメール王名表の冒頭の一部である。⁽¹⁾バド・ティビラの後、王権はララク、シッパル、シュルッパクと経巡り、5都市で王8人が、計241200年在位した。

洪水が「全土を押し流した後に」、再度下された王権はキシュに留まったと述べられており、キシュでは王23人が計24510年3ヶ月3½日統治したということになっている。

「キシュは、武力に敗れ、王権はエアンナに移行した。

メスキアグガシエル、ウツ神の子は、大祭司 En となり、王 Lugal となって324年在位した（中略）……

エンメルカル、メスキアグガシエルの子は、ウルク市を建造したウルクの王は、王となって、420年在位した。

聖なるルガル・バンダは、羊飼いは、1200年在位した。

聖なるドウムジは、（中略）100年在位した。聖なるギルガメシュは（中略）……、126年在位した（後略）……」

ウルクの王12人が計2310年統治した後に、ウルクもまた、「武力に敗れて」王権はウルへ移行したと述べられている。

在位年数の天文学的数値は別として、実在が確認されている王名の最古のものは、キシュの22代目王エンメバラゲシ Enmebaragesi で、《メバラ（ゲ）⁽²⁾シ、キシュの王》と記されたアラバスター容器破片がデイヤラ河流域で発見されている。23代目の王アカは、前者の子で、ウルク第1王期の6代目の王ギルガメシュとほぼ同世代と考えられている。一方、王名表のウル第1王朝の創始者⁽³⁾メスアネパダ⁽⁴⁾ Mešannepadda はトゥムマル文書によれば、エンメバラゲシ及びアカの建立によるニップールのニンリル女神に奉納されたトゥムマル神殿を再建しており、更にその後、ギルガメシュが修復を行ったことが述べられてい

る。クレーマー S.N. Kramer は、キシュ、ウルク、ウルは相前後して存亡し、ある時期にはほぼ同等の勢力を持って⁽⁵⁾鼎立していたのだろうと考えている。またウルの王墓に埋葬されていたブアビ、メスカラムドゥ、アカラムドゥ等は、前2600年頃に実在していたウルの王、あるいはその親族とされているが、⁽⁶⁾彼らはメスアネパダより少し古く、メバラゲシにほぼ年代を同じくしていたと考え⁽⁷⁾られ、考古学年代では、E.D. Ⅱ 期末あるいはⅢ 期初頭に相当する。⁽⁸⁾

今世紀初頭から、ディヤラ河流域の各遺跡の発掘調査を行ったフランクフォート H. Frankfort を中心とするシカゴ大学発掘隊は、E.D. 期を三期に分類したが、⁽⁹⁾シュメール各地の遺跡エリドゥ、ウル、キシュなどで発掘された現在最古のものと考えられる宮殿建築でも E.D. Ⅱ ～Ⅲ 期の年代で、Ⅰ 期については、プラノコンヴェクス煉瓦の使用開始、文字の形の変化、丸彫彫刻の発展、浮彫壁画装飾の様式の違いなどから、J.N. 期と⁽¹⁰⁾区別されているのであって、王名表にはエンメバラゲシ以前にも、これほど多数の王名が記載されているにもかかわらず、確固たる支配権の存在を示すような王碑文や宮殿などは現在のところ、まだ発見されていない。

ウルクの聖域エアンナ地区においては、古拙Ⅳ層（ウルク期）からⅢ層（J.N. 期）にかけて建造物の全面的な建替えが行われ、⁽¹¹⁾聖域の様相が一変したが、Ⅲ層からⅡ層（E.D. 期）以降にかけてはほとんど変化がみられない。また「Ⅳ層の大神殿群破壊→地均しと潔めの儀式→Ⅲ層の高基壇を含む新しい建築活動」の変遷はきわめて短期間に実行されている。⁽¹²⁾

Ⅲ層の新建造物群は、まったく実用本位に構成されているとしか思えないほど装飾部分が少なく、Ⅳ層の大神殿群に見られたプラン上のシンメトリックな壮麗な建造物は姿を消してしまい、宗教儀式のための建造物は、後代のジクラトの原型である高基壇と、その周辺に設けられた燔祭用舟型炉を二基ずつ持つ7室続きの小部屋群のみであった。

このような聖域の変革は、宗教理念及び儀式の変化に伴って実現したものと思われるが、これを⁽¹²⁾実証する手段は、現在のところはない。しかし、短期間にこれだけ大規模な聖域の改変を行うためには、それ相応の財力及び人力を統率できる強力な支配者層の存在なしには考えられないことである。そこで、もしもそのような有力な支配者集団が存在していたとすれば、J.N. 期から E.D. 期

にかけてのエアンナ地区内の何処かに、居住あるいは少なくとも行政業務のために常駐していた場所——宮殿とまではいかなくとも、それに類似した建造物があつたのではないかと思われる。

そこで、本論文では、エアンナ地区の遺跡の状況(J.N. 期～E.D. 期)を展望した上で、他都市におけるE.D. 期の宮殿や神殿内住宅の構造との比較検討を行つてみたい。

II エアンナ地区古拙 III 層遺跡⁽¹³⁾ (第1図)

エアンナ地区古拙層の建造物がすっかり破壊され、地均しが行われ、整地された聖域にまず設置されたのは、17基の大きな舟型炉で NdNe XVI₄～XVI₅ 地区に10基、Od XVI₄ に2基、PaPbXVII₂ 地区に5基、いずれも約5.5m長さ、約90cm巾、約70cm深さの舟型炉が舟べりを接する形で60cm間隔に北東～南西方向に並んでいた。レンガ積みが赤く焼け、燃焼の煤が残存しているのに木材の灰や骨片などは全然なかったことから、発掘者たちはこれらの舟型炉は地鎮祭で土自体を潔めるために使用されたものであつたと結論している⁽¹⁴⁾。

エアンナ古拙 III 層は建築の発掘段階から III 期に分類されている。

(1) III 期：最も顕著な構築物はPaPb XV₅ 地区に築かれた高基壇で、はじめは約23×18m²の大きさだったが、その後たびたび改築され、ウル第 III 王朝のウルナムは約55m 平方のジクラトに改修し、セレウコス朝に至るまで3000年の長きに互に存続することになる⁽¹⁵⁾。その南側には鋳モザイク装飾やニッチのある中庭 Hof が形成され、さらに南東側には7室続きの小部屋群があり、各室2基ずつの燔祭用炉が設けられていることは先述の通りである。これは土を潔める地鎮祭用炉とは異なり、祭礼に供せられた犠牲動物の骨片や植物性燃焼物の残滓が確認されており、また修理改修の状況から E.D. 期に至るまで頻繁に利用されていたことが判る。7室を結ぶ壁外には約40×50m²ほどの中庭が形成されていたようで、南西隅には供物骨片や燃料残滓が掃き出されていたことが確認されている⁽¹⁶⁾。

(2) III_b 期：OcOd XVI₁ 地区の中庭65の4基の燔祭用炉は、この時期に設置されている。この中庭を中心に第62室及び両端の第61、63室、第66、67室及び第21、22室の一群と戦前の発掘による第37～39室群が建造されたのもこの時期と

第1図 エアンナ地区古拙Ⅲ層大門附近 —UVB XXIII, Taf. 30 による—

考えられる。第22室は入口で、第21室は沐浴室であつた⁽¹⁷⁾。また第40～56室群及び中庭75を中心とする各室もⅢ_b期の建築でこれらは発掘者によれば、『居住区』Wohnquartier ということだが、発掘者自身も説明しているように、これらは一般市民用ではなく、宗教に密接な関連のある人々が使用したのであることは、この場所がⅣ層期の大神殿群のひとつC神殿の跡地で、聖域のほぼ中央にあたること、更に中庭65内の祭礼用炉の存在が、それを裏付けているといえよう。⁽¹⁸⁾中庭65周辺建造物、中庭75周辺建造物及び第40～46室の一群は、それぞれ細長い回廊によって結ばれていた(Korridor 60)。

(3)Ⅲ_a期：この時期に高基壇がL字形に増築され、E.D. 期に到るまでこの形体で使用され続けた。Ⅲ_b期の居住区の各室はひき続き修理され、再利用されていた。

この期の建築活動として最も顕著なるものは『大門』gewaltige Toranlage、『迷宮』Labyrinth 及び Pa XVI₂ 地区の『宝物庫』Schatzhaus であるが、これらは全て戦前の発掘によるものである(1933～34年冬期)。宝物庫内部からはアラバスター製大容器、動物像、スタンプ印章、円筒印章、象眼細工の美しい注口付祭礼用器など、ウルク期からJ.N. 期にかけての貴重な資料も数多く発見されたことが知られている。⁽²⁰⁾

大門(35)は南東側、即ち外部へむかって階段が設けられていたと思われる。他の壁面に較べ著しく分厚い壁の内側には、細かいニッチ装飾が見られ、さらに周辺には赤い大型鋳や黒白の小型鋳が多数散乱していたことから、Ⅳa層の『角列柱鋳モザイク神殿』と類似した鋳モザイク装飾が大門壁面に施されていたのではないかと考えられる。⁽²¹⁾この大門構築から北西方向へ二本の壁が築かれており、その先に『迷宮』があつて、それらによって囲まれた中庭が形成されていたと考えられるが、その内部は破損が激しく、詳細は不明である。⁽²²⁾

『迷宮』はいくつかの小部屋を曲りくねった廊下で結ぶプランを持っている辺々約10mのほぼ正方形の建造物だが、第4室のみにニッチ装飾が施されていた。また二本の壁の北東内側にもニッチ装飾がみられるが、それらの意味については何も判っていない。

第20回報告書において、レンツェン H.J. Lenzen はⅢ層建造物群はその北西側にある後代の『練土大建造物』Stampflehmgebäudeの下敷きになって不明

の部分⁽²³⁾がかなり有るということを述べている。戦前1934～35年の発掘⁽²³⁾で既にその一部が発見され、戦後の第21～22回発掘において、更に調査が続行されたが、J.N. 期のリームヒェン煉瓦とも、E.D. 期のプラノコンヴェクス煉瓦とも異なる塗込め式練土によるこの建造物は、一見粗末な造りで、以前はイナナ女神の祭礼用家畜小屋かと思われていた⁽²⁴⁾。だが建物の規模の大きさや構造の複雑さが知られるにつれ、その考えは放棄されるに至ったが、依然としてこの建造物の使用目的は不明のまゝである⁽²⁵⁾。ただこの建物に埋込まれていた解読可能な粘土書板の多くが経済文書であったことから、レンツェンは「この練土建造物は、ひよっとするとJ.N. 期からE.D. 期におけるエアナ聖域内の経済中心地区であったと仮定できるのかも知れない」と想定している⁽²⁶⁾。翌年にジュミット J. Schmidt が隊長としてレンツェンと交替してからは、主としてアヌのジクラト地区の発掘がなされたが、10年経った1976年の第33回発掘において再度練土大建造物の調査が再開され、古拙Ⅲ～Ⅰ層の状況がほぼまとめられるに至った⁽²⁷⁾。

それによると(第2図)、練土大建造物はⅢa層期(J.N. 期後半)にまず建物の基礎が築かれ、その後改修を重ねながらE.D. 期まで使用され続けていたことが判った。現在発掘されている大きさだけでも100×120m²ほどあり、高さ3m以上の壁面が残存している箇所さえ発見されている。E.D. Ⅲ期末に構築全般にわたり、瓦礫で埋立てられたが、結局その上層には新建築は建造されず、前1千年紀に集合住宅が建造されるまで、そのままの状態を保っていたようである。その埋立てに用いられた瓦礫から多数の粘土書板破片が出土しているが、200箇以上が古拙文書であったという⁽²⁸⁾。

シュミットによれば、この練土建造物はⅢa期に創設されて以来少なくとも4回以上の改修が試みられていて、Ⅱa期に2回に亘る埋立てがあった後、古拙Ⅰ期に至り埋立ての瓦礫が除去され、壁面上層部が分厚く補強された。続いて床面がⅢ期床面を貫いてⅣa層遺跡を破壊するほど思い切って掘り下げられ、下方に第2の床面が設けられている。次に、再度床面がⅢa期と同じ高さになり、側面が大型煉瓦 *großformigen Patzen* 及びプラノコンヴェクス煉瓦で補強されている。そして最終的には建物全体がすっかり瓦礫で蔽いつくされてしまったのである。このような度重なる埋立てが何を意味するのかは、現在のところ

第2図 エアンナ地区練土大建造物
—UVB XX, Taf. 30 より—

ろはまったく解釈されていない。建物内部は J.N. 期に建造された当初は入念な造りの壁面を持つ、比較的に整然とした矩形の各室から構成されているのに、E.D. 期においては、練土壁の改築毎に粗野な仕上げとなり、壁の厚みが増すと共に部屋の形がくずれてきているが、その理由もまた、まったく謎のままである。⁽³⁰⁾

発掘者によれば、入口は第102～106室（1.25m 厚さの壁で仕切られている）⇒第101室⇒2つの入口⇒第99, 100室（後代になると、こゝに前室が設けられる）⇒第97, 98, 95, 94, 96各室⇒回廊93と続いている。この回廊93は E.D. 期中頃に大型煉瓦やプラノコヴェクス煉瓦で上部まですっかり埋立てられてしまった。中程の入口から回廊126, 第125室と続くが、回廊93が埋立てられてからは第96室西側隅の入口が第102～106室群と、北西側に位置する中庭127周辺各室とを結ぶ唯一の通路となっている。回廊126⇒第124室～119室⇒中庭127と続き、中庭111から左側へは第110～107室（細長い行き止まりの部屋）へと続き、右側からは第112～114室、更に北西方向へと抜けて行く。このように100m 平方以上もの面積の大建造物としては極端に出入口や通路が少なく、しかも非常に入り組んだプランであることから、レンツェンは「もし（エアンナで）これまで発掘された建物のどれかが『迷宮』という名前にふさわしいとすれば、この練土大建造物こそ、まさにそれだったのだ」と述べているほどである。⁽³¹⁾

III E.D. 期以降の宮殿プラン及び「神官住宅」について

以上に述べたウルク・エアンナ地区の建造物群のどれかが支配者の住居あるいは宮殿であったと考える手掛りはないものだろうか。この観点から、次に E.D. 期以降のシュメール各地におけるプランの明白な純然たる宮殿、あるいは大祭司の住居とみられる、いわゆる「神官住宅」について述べてみたい。

a) エリドゥ宮殿⁽³²⁾（第3図）

本論の冒頭に挙げたシュメール王名表では、天から下された王権はまずエリドゥに留まったことが述べられているが、まさしく現在知られる限りでは最古の「宮殿」と思われる大建造物がエリドゥで発掘されている。⁽³³⁾

一対の建造物であったらしいエリドゥ宮殿は、双方ほぼ同じプランのようで、報告書は北側の宮殿についてのみ述べている。

第3図 エリドゥ宮殿 —Sumer 6, 1950, Fig. 3 による—

略々 $45 \times 65\text{m}^2$ の大きさに、プラノコンヴェクス日乾煉瓦で建造され、プランが驚くほどキシシュの「A宮殿」(後述)に類似している。このことから、発掘者のサファル F. Safar は「この(プランの)一致からも、シュメール人が既に基本的な宮殿設計案の構想を持っており、宮殿を建立する時には、いつでもそれに従っていたのだということが判る」⁽³⁴⁾と述べている。

内部は三つのユニットに類別される。第1は入口部分で、中庭30を中心とする各室から成り、第35室及び第11室は床面が石畳で、おそらく宮殿へ入る人々が手足を潔めた沐浴室であったと思われる。第2は第31室から右方へ中庭29があり、ここからは第17, 23, 25, 26各室へ通じている。第3は、中庭1中心の第2～8室と中庭32を中心とする各室との二部分に分かれる。後者は、調理、水まわり、貯蔵などに利用されたようで、第26室の床には立派な排水設備がなされていた⁽³⁵⁾という。前者は、おそらく王の執政あるいは日常生活に関連する各室と考えられるが、出土品が非常に少なく、確証はされていない。

第4図 キシュの「A宮殿」—P. R. S. Moorey, *Kish Excavations* 1923—33, Fig. F. による—

b) キシュの「A宮殿」⁽³⁶⁾ (第4図)

洪水の後に再度天から降された王権が、最初に移行したと王名表に記されているキシュの遺跡は、大小15箇以上の遺丘から成っているが、E.D. 期の建造物としては最北端のプラノコンヴェクス建造物 *Plano-Convex Building* と最南端の「A宮殿」*Palace 'A'* がある。

前者は分厚い外壁に包まれ、東側に角を向けた三角形の建物で、西側は損傷が激しく構成は定かではない。大きな中央室を中心として周辺に沢山の小部屋が設けられているが、奇妙なことにプラノコンヴェクス煉瓦舗装を塗込め、あるいは腰羽目まで同様に防水加工を施してある部屋が多く、随所に水溜や井戸、排水溝が設けられており、また床面に据えつけられた大きな壺のある部屋さえ発見されている(第XIII室、通廊XXIIなど)。それらは水や酒類を蓄えたものと思われ、小部屋群は倉庫室ともみられるところから、ムーレイ P.R.S. Moorey は、これは宮殿というよりは作業場を含む要塞あるいは兵器庫ではなかったかと述べている。⁽³⁷⁾

「A宮殿」は現在判明する限りでは、二つの建造物から成っている。出土品から E.D.Ⅲ 期初頭あるいは E.D.Ⅱ 期末と考えられるが、北側の建物(約75×40m²)の方が南側の建物(約55×30m²)より少し早い時期に建設されたようである。プラノコンヴェクス煉瓦の建造物で、右側に巾13mの入口部があり、内壁にはニッチ装飾が施され、三段構えで狭くなった中央部に階段を設けた大門34があるが、北側建造物との関連を示す部分が欠損しており、両者の関係は判然としない。

〈第1案〉入口⇒通廊28⇒第27室⇒第23室(床面防水;沐浴室)⇒通廊22⇒回廊1⇒第5室⇒第9室⇒第15室(第16側室は防水床面)⇒第14室⇒中庭6(約11m平方)⇒周辺各室へ。

〈第2案〉入口⇒通廊1。この後は上述の如く第5室から中庭6へ抜ける順路と、通廊22⇒第24室⇒第23室(沐浴室)⇒第27室⇒通廊28⇒第29～31各室へ抜ける順路の二通りの方向が考えられる。

第30室の床は瀝青で防水され、同様の防水加工がなされた大桶が3箇発見されている⁽³⁸⁾。この区画をサービスエリアと考え、中庭6周辺を王の執政に関する場所と考えるならば、第2案の方が適格と思われるが、これはあくまでも推量の域を出ない。

建物全体は二重壁構造で、周囲を巡る回廊1は約2.7m巾であった。通廊39で隔てられた南側建造物は第41室から進入すると、第47室～第49室の比較的大きな部屋群へ通じており、通廊42(右側に4本の列柱)から進入すると、第56～58室⇒中庭45へと通じている。この中庭には、直径約2mの4本の列柱が並び立っていた。第56室から右方の第53～51室⇒第46室へと通じているが、第51室は床面が防水加工されていた。

「A宮殿」の壁面は、真珠貝、ラピスラズリ、桃色石灰岩片などで象眼された飾り板や浮彫片岩板などで飾られていたらしく、第35室と第61室から、その断片が数多く出土している。⁽³⁹⁾

c) カファジェの楕円神殿内D住宅⁽⁴⁰⁾(第5図)

楕円形の二重壁に囲まれたカファジェの神域の北隅の壁の間隙に、大祭司あるいは相応な権力者の私的住宅とみなし得る、「D住宅」House Dと命名された一部がある。

第5図 カファジェ橢円神殿内個人住宅（構築第1期）
—OIP 53, Pl. 3 による—

橢円神域は3回の改造時期が確認されており、第1期がE.D.Ⅱ期頃と考えられるが、この期間内にも部分的な改築が更に三段階に亘って行われていた。

D住宅の構造は、外周壁の門を入ると左へ折れ、かまどのわきから1m巾の入口を通り、入口ホール⇒通廊K43:6(1.10m巾×10.60m長さ)⇒K43:2室(2.30×4.60m²)⇒中庭L43:3へと通じている。また通廊K43:6から奥へK43:1室⇒L43:1またはL43:3⇒各室へと進入できるが、発掘者は、三角の小部屋L43:1はプライベートに使用されていて、〈入口⇒K43:1室〉の進入方法は居住者のためのもので、外来者は〈入口⇒K43:2室⇒中庭〉の順路をとったものと考えている。K43:2室は第1期3段階の改築時に床面が瀝青で防水舗装を施され、外来者が手足を潔める沐浴室として使用されたことが想定できる。中庭L43:3の北側にはプラノコンヴェクス煉瓦と瀝青で作られた水場があり、細い排水管が外周壁外部へ通じていた。L43:4室には祭壇があり、個人専用の祭礼室として利用されていた。M43:9にはかまどがあり、こゝは作業室であつたらしい。中庭から南西側のL43:3室(4.60×17.70m²)周辺は日常生活に使用されていたようで、粘土製テーブルの脚部や浮彫石板、魚網、おもりなどの日常家具調度品が多数出土している。

第6図 テルアグラブのジャラ神殿内個人住宅 —S. Lloyd, *The Archaeology of Mesopotamia*, Fig. 74 による—

d) テル・アグラブのジャラ神殿内

個人住宅(第6図)

約60m²平方の複合形式の神殿であるが、南側の一隅に大祭司あるいはそれに準ずる者の私的住宅が設けられている。⁽⁴¹⁾

A室から北方へ進む順路は、B室を通り、E祭祀室へ、あるいは中庭Gから中庭Dを通過して、北西側の奥の二つの小祭祀室へ、あるいは中庭Cから左方の主要祭祀室へと神殿部分に通じているが、

A室から左へ折れると狭い入口があり、約10m長さの通廊を経て、第5室(瀝青で防水された沐浴室)⇒中庭1⇒各室へと

通じており、このプランは前述のカファジェの精円神殿D住宅と類似している。

e) テル・アスマルの二つの宮殿

次に、宮殿建築の発展した形体とはどんなものであるかという点から、同じディヤラ河流域のテル・アスマルにおける後代の二つの宮殿を概観してみたい。

そのひとつ、遺跡の北西側に位置するアッカド宮殿(第7図)⁽⁴²⁾は前2400年頃の宮殿であるが、南北に長く(約26×72m²)、北東部に入口がある。井戸、排水管の完備した前庭1E14から右方へ、3A E14室、3B E14室(排水設備を有する沐浴室)から支配者の私的住居部へ通ずる。5 E14室は便所で、7 E14室は浴室と思われる。前庭1 E14から左方へ、中庭1E15(約10×12m²)を通ると、二種類のユニットへむかうことができる。ひとつは広間2E16の中心の各室で、調理場、防水された浴室、倉庫などのサービスエリアであり、もうひとつは広間6F17を中心とする建物南端の各室で、9F17各室からビーズ、化粧品、櫛その他の日常生活用品が多数出土しており、フランクフォートはこのエリアについて、「ハーレムの可能性がある」と指摘している。

以上の三種のユニットは独立性が高く、一旦中庭あるいは前庭へ戻らなければ、相互の往来はできないように壁で仕切られている。

テル・アスマル遺跡の南西側には、前3千年紀末期の建造になる「ギミルシ

第7図 テル・アスマルのアッカド宮殿

—OIC 17, Fig. 20 による—

第8図 イルシュイリアの宮殿と「ギミルシン」神殿
(Scale 1 : 400) —OIP 43, Pl. 1 による—

ン神殿」がある。⁽⁴³⁾（第8図）

「ギミルシン」とはウル第Ⅲ王朝の第4代王シュシンの古い読み方であるが、ヤコブセン Th. Jacobsen 訳の建築碑文には次のようなことが記されていた。⁽⁴⁴⁾

「聖なるギミルシン（＝シュシン）よ。

アヌに名前で呼ばれし人よ。

エンリルに愛されし人よ。

国土をおさめし王よ、

四界の王、猛き王者、ウルの王よ。

四界の王よ、（吾が）神よ。

（我）、イトゥリアが、エシュヌナのエンシが、（君の）下僕が、
神殿を建立したてまつる」

この略々28m 平方の「ギミルシン神殿」の西方にイトゥリアの子イルシュイリアが宮殿部を増築して以来、エシュヌナ（テル・アスマルの古名）の歴代の支配者は続々と増改築を行ない、ついには雑然としたプランになってしまうのだが、こゝでは最初のイルシュイリアの宮殿プランについて述べたい。

宮殿の主要入口は「ギミルシン神殿」に近い所にあり、左へ折れて20m ほど細い通廊を進むと沐浴室に到達する。北側の狭い戸口から宮殿中庭に入るが、北東方向に狭い舗道のような敷石が置き並べられていた。中庭の北側の各室ユニットは王の居住室と考えられ、中庭東側は、「玉座の間」⁽⁴⁵⁾Throneroom⇒大広間 Great Hall と続く。大広間は丸天井があったと思われる、「ギミルシン神殿」からも順路をたどって進入することができる。

宮殿中庭の西側には付属神殿（王個人専用か）があり、その南側には直接建物外部へ出られる出入口が設けられている。

IV まとめ

以上に概説したように、E.D. 期以降の宮殿や神殿内住宅に共通する構想は＜中庭を囲む各室＞の形体であって、用途（日常生活の場、公式用途の部分、サービスエリア、祭祀用各室、その他）に応じて、明確に区別できる利点がある。

またプランの基本は、＜入口⇒狭い通廊、前庭、中庭⇒沐浴室⇒中庭、広間⇒各部、各室＞となっている。

神殿建築の初めは、神像、祭壇、祭祀用具など宗教儀式に関するものだけが存在していて、内部には人が居住していないものであったのだが⁽⁴⁶⁾、J.N.期からE.D.期に至り、神殿内部の機構が複雑になり、多様な役職や職能が生じてくるにつれ、必要に応じて炉、かまど、排水設備等が設けられ、役職に従事する人々の居住室が付加されるようになり、次第に聖俗複合体建築として発展するに至ったと思われる。

このような観点から、再度ウルクのエアンナ古拙Ⅲ層遺跡をふりかえってみると、少なくともⅢ_a層では、＜大門構築⇒二重壁内の細長い通廊15⇒第14室⇒いわゆる「迷宮」＞とたどることができ、また＜通廊15⇒通廊60⇒第22室⇒第21室(沐浴室)⇒中庭65中心の各室、あるいは中庭75中心の各室＞とたどることができる。さらに第90室～第92室⇒通廊93⇒第96室⇒練土大建造物内へと入って行くことも可能である。しかし、先にも述べたように、練土大建造物は、わずか一筋ではあるが、約100×120m²の大きな建物の中をめぐって端から端まで迷路の如く、通り抜けることができる順路がある。この点から見ると、練土大建造物は宮殿として使用されたのではなく、キシュのプラノコンヴェクス建造物と同様に兵器庫、あるいはジェムデット・ナスル遺跡の大建造物について想定されている如き通商経済関係の役所のような役割を持った建物ではなかったかと考えられる。

むしろ、前述の「大門構築から中庭65周辺、中庭75周辺、通廊60を挟んで向い側の第40～46室周辺を含む領域」の方が、「宮殿」を想定するのに適した構造を持っていると思われる。

中庭65には祭祀用の舟型炉が4基設けられているが、それはまさしくⅣ層期のC神殿の胴部内陣と重複する位置に存在しているのである。またⅣ/Ⅲ中間層において、地均しを行う直前の段階で、この地点に大小6基の炉が設置され、少なくともその内の2基は地鎮祭用舟型炉の一部であったことから⁽⁴⁸⁾、Oc XV I₃、Od XVI₄周辺と神聖視する意識は、聖域の激しい変革にもかかわらず、Ⅳ層からⅢ層へと伝達されたと見ることができる。

また、それ故にエアンナ聖域の大改造を実行できるだけの財力、人力を共に

動員することのできた強力な権力者が、ここに宮殿構想の建造物を構え、また C 神殿跡に宮殿内祭祀場所を設備したと考えることは、あながち不可能ではないと思う。 (了)

註

- (1) Th. Jacobsen, *The Sumerian King List*, Chicago, 1973, pp. 71 f..
: S.N. Kramer, *The Sumerians*, Chicago, 1964, pp. 328 f..
- (2) IM. 30590. P.R.S. Moorey, *Kish Excavations 1923~1933*, Oxford, 1978, p. 166. E. Sollberger et J.-R. Kupper, *Inscriptions Royales Sumeriennes et Akkadiennes*, Paris, 1971, p. 39. P. Delougaz, *The Temple Oval at Khafajah*, Chicago 1940, p. 146, fig. 126(2). W. Nagel, “Frühdynastische Epochen in Mesopotamien”, *Vorderasiatische Archäologie Studien und Aufsätze*, 1964, S. 184, Pl. II.
- (3) 英雄詩「ギルガメシュとアカ」。S.N. Kramer, *The Sumerians*, *op. cit.*, pp. 186~190. W.H. Ph. Römer, *Das sumerische Kurzepos »Bilgameš und Akka«*, Neukirchen, 1980, S. 38ff.
- (4) Tummal Inscription: S.N. Kramer, *Sumerische Literarische Texte aus Nippur*, Berlin, 1961, S. 14-15 ff..
_____, *The Sumerians*, *op. cit.* pp. 46-49.
- (5) S.N. Kramer, *ibid.*, p. 50.
- (6) E. Sollberger et J. Kupper, *op. cit.*, p. 41.
- (7) *ibid.*, p. 39.
W. Orthmann, *Der Alte Orient*, Oldenburg, 1975, S. 558.
P. Amiet, *L'art antique du Procheorient*, Paris, 1977, p. 572.
- (8) P. Delougaz, *op. cit.*, p. 146, fig. 126. P. Charvát, “The Oldest Royal Dynasty of Ancient Mesopotamicy”, *Archív Orientální*, 44, 1976, pp. 347~348.
- (9) *Fischer Weltgeschichte, Die Altorientalischen Reiche 1*, Hamburg, 1965, S. 377. W. Orthmann, *op. cit.*, S. 26.
- (10) 岡田明子「エアンナ地区神殿の変遷について——ウルク期〜ジェムデット・ナスル期を中心に——」『日本オリエント学会創立25周年記念オリエント学論集』刀水書房, 1979年, 89-113頁。
- (11) H.J. Lenzen, “Die Architektur der Schicht Uruk Arch. III (Djemdet Nasr) in Eanna”, *Studia Orientalia*, = *St. Or.* vol. 46, Helsinki, 1975, S. 169.
- (12) *ibid.*, S. 188.
- (13) 岡田明子, 前掲書, 105-108頁, 挿図 4.
- (14) *Vorläufiger Bericht über die von dem Deutschen Archäologischen Institut und der Deutschen Orient-Gesellschaft aus Mitteln der Deutschen Forschungsgemeinschaft unternommenen Ausgrabungen in Uruk-Warka (=UVB.) XVII*, Berlin,

- 1961, S. 11. *UVB XVIII*, Berlin, 1962, S. 8-9. H.J. Lenzen, *St. Or., op. cit.*, S. 170-172, _____, „The Eanna District after Excavations in the Winter of 1958-59, *Sumer* 16, 1960 pp. 8-9.
- (15) H.J. Lenzen, *St. Or., op. cit.*, S. 173-178.
- (16) *ibid.*, S. 177-178.
- (17) *UVB XX* 1964, S. 15.
- (18) *ibid.*, S. 15.
- (19) 岡田明子「ウルク出土のアラバスター製大容器に関する問題点」『史観』97冊, 1977年, 64-74頁,
- (20) E. Heinrich, *Kleinfunde aus den Archaischen Tempelschichten in Uruk*, Berlin, 1936.
- (21) M.A. Brandes, *Untersuchungen zur Komposition der Stiftmosaiken an der Pfeilerhalle der Schicht IVa in Uruk-Warka*, Berlin, 1968.
- (22) A. Perkins, *The Comparative Archaeology of Early Mesopotamia*, Chicago, 1968, p. 127. H.J. Lenzen, *St. Or., op. cit.*, S. 186.
- (23) *UVB XX*, 1964, S. 14. *UVB XXIV*, 1968, S. 11.
- 新バビロニア時代に掘られた穴による破損が激しく, また発掘用トロッコ線路が敷設されていた場所であったことから, 全貌の把握は大変に困難であったらしい。
- (24) J. Schmidt, „Uruk=Warka, zusammenfassender Bericht über die 33. Grabungskampagne“, *Sumer* 33/1, 1977, S. 107. この報告は, 詳細なコメントがなされているが, 非常に印刷状態が悪く, Fig. 1 の半分が裏がえしに印刷されていたり, 誤字脱字も多く, *UVB XXXIII* 報告書の入手が待たれるところである。
- (25) *UVB XXIII*, 1967 S. 26.
- (26) *ibid.*, S. 27.
- (27) J. Schmidt, *op. cit.*, S. 105-118.
- 第32回発掘時 (1975年) は作業員の動員数が極端に少なく, 例年のように二ヶ所以上の発掘は不可能であった。そのため, 主力をエアンナ地区に集中したので, 第33回発掘は, いわばその続きである。„Excavation in Iraq, 1976, Uruk-Warka“, *Iraq*, 39/2, 1977, pp. 316-318. 上記 *Sumer* 33/1 とほぼ同内容の報告。
- (28) *Iraq, ibid.*, p. 317. *Sumer, ibid.*, S 115, Fig. 2.
- (29) *Sumer, ibid.*, S 108, Fig. 3.
- (30) *UVB XXIII*, 1967, Taf. 30 (J.N.期), Taf. 29 (E.D.期)
- (31) *UVB, ibid.*, S. 26
- (32) この項は, *Sumer* 6, 1950, pp. 27-33によっている。
- (33) *UVB XXV*, Berlin, 1974, S. 16.

最古の宮殿; 従来の三列構成プランを基とする他の神殿とはまったく異なる「E神殿」について, あるいは古拙Ⅳ_a (あるいはⅣ_b) 層期に属する宮殿ではないかという報告がなされている。略々57 m 平方の建物の中央部に約31 m 平方の中庭があり, 四辺の各室配置は, はば類似のプランであった。レンツェンは, これを「閲覧用宮殿」Emp-

fangspalast かも知れないと考えた。しかし、これが最古の宮殿だという決定的な裏付け証拠は何も発見されていない。H.J. Lenzen, “Die Bauwerke von Eanna am Ende der Uruk IV Periode,” *Le Temple et le Culte*, Istanbul, 1975, pp. 38–39. ———, “Die Architektur in Eanna in der Uruk IV Periode”, *Iraq* 36, 1974, S. 121–122, Pl. XVI. また、遺跡ジェムデット・ナスルの遺丘においても、S. ラングドンにより、「宮殿」と命名された大建造物（92×48m²）が発見されているが、保存状態が非常に悪いために全体のプランは不鮮明であり、土器破片、粘土書板、印章などが発見されているが、文書は全て経済関係のものであるところから、P.R.S. Moorey は、この「宮殿」に関しては実際は通商関係に利用された建造物ではなかったかと述べている。P.R.S. Moorey, “The Late Prehistoric Administrative Building at Jamdat Nasr”, *Iraq* 38, 1976, pp. 95, ~fig. 3. ———, *Kish Excavations 1923–1933*, Oxford, 1978, pp. 147–157. figs. Q,R,S.

- (34) Sumer, *op. cit.*, p. 31.
- (35) S. Lloyd, *The Archaeology of Mesopotamia*, London, 1978, pp. 122–124.
- (36) この項は、主として、次の本によっている。P.R.S. Moorey, *Kish Excavations*, *op. cit.*.
- (37) *ibid.*, p. 42.
- (38) *ibid.*, p. 57
- (39) S. Langdon, *Excavations at Kish*, vol. 1, Paris, 1924, pp. 59–62.
- (40) P. Delaunay, *op. cit.*, pp. 60–64 参照。
- (41) S. Lloyd, *op. cit.*, pp. 120–121, Fig. 74, P. Delaunay and S. Lloyd, *Pre-Sargonic Temples in the Diyara Region*, Chicago, 1942. 今回残念ながら入手できなかったもので、第6図は前者によっている。
- (42) H. Frankfort, *Iraq Excavations of the Oriental Institute 1932/33, Third Preliminary Report of the Iraq Expedition*, Chicago, 1934, pp. 23–39, Fig. 20.
- (43) H. Frankfort, S. Lloyd, and Th. Jacobsen, *The Gimilsin Temple and the Palace of the Rulers at Tell Asmar*, Chicago, 1940, Pl. 1.
- (44) *ibid.*, pp. 134–135.
- (45) *ibid.*, p. 32.
- (46) 小林文次『建築の誕生——メソポタミアにおける古拙建築の成立と展開』相模書房, 1959年, 49頁.
- (47) P.R.S. Moorey. *Iraq* 38, *op. cit.*, 本註33 参照.
- (48) UVB XXI, 1965, S. 13. Taf. 30.

（早稲田大学大学院研究生）